人権教育だより

特集　文部科学省人権教育研究指定校　２年間の取組
…自他への固定的な見方を、体験活動等を通して乗り越え、さらに自己肯定感を高める学びの成果を紹介します。

第８４号
発　行　長野県教育委員会
編　集　心の支援課人権支援係
発行人　原　良通
長野市大字南長野字幅下６９２－２
電　話　０２６－２３５－７４５０
ＦＡＸ　０２６－２３５－７４８４
ＵＲＬ　kokoro@pref.nagano.lg.jp

平成27・28年度文部科学省人権教育研究指定校

かかわり合うことで一人一人の自尊感情を育む
―長野市立松ヶ丘小学校の取組―

１　研究のテーマ

自己を表現し合い、友とかかわり合う中で自尊感情を高める人権教育のあり方
～学級集団づくりを通して～

２　研究のテーマを設定した背景

松ヶ丘小学校では、これまで、「みんなは一人のために、一人はみんなのために」を人権教育の目標として、自分や友だちの良さに気づき、支え合い、認め合いながら自他に尽くす心の育成を目指して取り組んできた。しかし、友のよさに気づくことはできても、なかなか自分自身のよさには気づくことができない児童や、学習や活動の際に「自分はどうせできないから」と自己限定をしてしまい、意欲的に取り組むことができない児童もいることが見えてきた。そこで、児童の『自尊感情』を高めるための支援や活動を大切にすることが人権教育における大事な柱となるのではないかと考え、本テーマを設定した。

自尊感情を客観的に捉える手段として、『Ｑ－Ｕ検査』を年２回実施し、その結果から得られた『学級満足度および学校生活意欲』の変化と児童の学校生活の様子、友との人間関係を比較する。また、自尊感情を高めるために、学習や活動の母体となる学級集団をよりよいものにしていくことが重要であり、学級での活動で友とかかわっていく中で、知識だけではなくより実践的な人権感覚が培われるのではないかと考え、学級の児童の実態と教師の願いに合った、有効な「対人関係ゲーム」を、外部講師を招聘し職員研修をおこなうとともに、授業研究を通して探っていくこととした。

３　研究の推進計画

１・２年学年目標
　○友だちのよさに気づき、誰とでも仲良く助け合おうとする。
３・４年学年目標
　○相手の気持ちを聞き自分の気持ちをはっきり話し、互いの違いを認め、支え合うことができる。
５・６年学年目標
　○自分の気持ちをしっかり表現し、一人一人の違いを認め合い、互いに尊重し合って生活することができる。
　○身近な社会にある人権問題や偏見に気づき、人権を守る事の大切さを知り、仲間との支え合いを実践する。

生活指導	教科・道徳	特別活動・総合的な学習
・特に配慮を必要とする児童の生活を見守り、全職員の共通理解による一貫した指導を行う。 ・子どもの言動に耳を傾け聞き役に徹し、声がけを通して、児童理解と心のケアにあたる。	・一人一人が思いを深め、友だちと関わりあって追究していく指導、その子のよさに目を向けた指導の充実を図る。 ・基礎基本の学力の定着 ・満足感、成就感の持てる授業	・一人ひとりの子どもがその子なりに伸び、自主的態度を形成していく指導 ・様々な体験活動から生活経験が豊かになり、人間関係が深まる指導 ・Ｑ－Ｕ検査の結果を生かした「対人関係ゲーム」などを行う。

人権課題　＜子ども＞いじめ防止　異年齢交流　保育園との交流　＜高齢者＞交流
＜外国人＞文化・価値観の理解　交流　＜アイヌの人々＞社会科の地理・歴史学習
＜障がい者＞福祉体験　＜同和問題＞身分制度　水平社宣言　＜女性＞男女の協力
＜インターネットによる人権侵害＞各教科学習における情報活用　情報モラル教育

学級経営	職員研修
・児童理解に基づいた経営方針・目標の立案と具現 ・配慮していきたい児童について全職員共通理解 ・Ｑ－Ｕについての分析、考察、実践	・子どもの良き他人モデルとなるよう自己研鑽 ・講演（人権、特別支援等）、読み合わせ等

家庭・地域との連携
授業参観日　学級懇談会　個別懇談会　家庭訪問　学校学年学級通信　地区懇談会
児童館・プラザとの懇談会　挨拶運動　ＰＴＡ諸行事　松ヶ丘見守り隊　地域への学校通信の回覧　松ヶ丘小学校コミュニティースクールの活動　安茂里甚句・しめ縄づくり等の指導等地域人材の活用

4　研究の成果と課題　～５年生の実践より～

（1）Ｑ－Ｕの活用

○児童の客観的な実態把握の出発点として、学校生活における基本単位である学級での人間関係のありよう、生活の満足度を指標としてとらえ、担任の見方と総合することで、より多角的な児童理解をすすめた。それにより、実態に即した活動の実践化が図ることができた。

○学習の後に行ったＱ－Ｕの結果から、学習の成果と課題が明確となり、次への学習へ生かすこともできた。

●Ｑ－Ｕは、児童の実態の多角的なとらえとして、あくまでも児童理解のための手段の一つであり、日常からアンテナを高くしなければならないということも分かってきた。

（2）『対人関係ゲーム』の活用

○対人関係ゲームには、遊ぶうちに自然に人と人とがつながって、集団内のコミュニケーションが円滑になるという効果がある。本校では、授業者の視点として、①ゲームの中で大切にしたいことを具体の姿で持つ、②常にグループ（集団）での活動となるよう支援する、③児童の主体的なルール作りへの支援、を明確にし、同じゲームの継続や、実態や願いに合わせた異ゲームの積み重ねを通して、児童の人権感覚を高めるようにしてきた。

（参考：研究発表授業　特別活動　本時案）

◇クラスへの担任の願い
○友だちに対して自分の意見を発信すること、友だちの意見をよく聞き、意見を受け入れることを身につけてほしい。
○友だちに対する呼び方や言葉遣いなどの基本的なかかわり方を見直し、よりよい関係をつくり上げていってほしい。
○男女、旧クラスの枠を越えた関係づくりをしてほしい。

◇本時の主眼
○自分たちのルールを作り、作戦を考えた子どもたちが、５年２組のオリジナルのくまがりゲーム「まつがり」に取り組んだり、活動の振り返りをしたりすることを通して、自分や友だちのよさに気づき、認め合うことができる。

◇人権教育の視点
○作戦会議の時には、友だちの考えを受容的に聞きながら、話し合いに参加している。
○友だちに自分の考えを伝えたり、相手の意見を聞いたりして、認め合いながら振り返りをしている。
○くまがりを通して自分や友だちのいい姿を見つけて、振り返りの場面で認め合おうとしている。

◆本時案

過程	学習活動	予想される児童の姿	・支援　　□評価	時
導入	１，オリジナルのルールについて確認する	・みんなが楽しめるルールになったな ・作戦はうまくいくかな。 ・助け合って勝ちたいな。 ・みんなのいいところを見つけられるようにしよう。	・学習カードや模造紙を見ながらオリジナルのルールを確認する。 ・ゲームを通して、友だちのいいところや自分のいいところを見つけられるように声がけし、意識させる。	3
展開	オリジナルのルールで、みんなが楽しめる「まつがり」にしよう			
	２，前時に考えた作戦の確認をする	・役割と作戦をみんなで確認しよう。 ・○○君と○○さんと△△さんで一緒に動いてね。 ・頑張って助け合おう。 ・勝つためにみんなで頑張ろう。 ・作戦通りに動いて勝つぞ。 ・○○さんが頑張っているな。	・画用紙、ホワイトボードを用意し作戦の確認をしやすくする。 （○○）作戦を確認する際に、声がけをしながら動きやペアを丁寧に確認し、ゲームの中での動きの見通しを持たせる。 （○○）作戦を確認する時、自分の役割や動きを確認させる。ゲームの中でうれしかったことを見つけられるように声がけする。	5
	３，まつがりをする			22
まとめ	４，本時の振り返りをする	・○○さんが一緒に動いて、教えてくれてよかった。 ・○○君が一生懸命走って助けに来てくれてうれしかった。 ・自分のことをほめてもらえた。頑張ってよかったな。 ・いいところを見つけてもらえてうれしかったな。 ・友だちのことを考えてルールを作ったり、ゲームをしたりすることができたな。	・ワークシートに友だちのよかったところ、自分のよかったところを書く。その後、付箋紙に友だちのよかったところを書き、渡し合う。その後、友だちのよかったところや自分のよかったところについて発表する。 （○○）ゲーム中のことや心に残ったことについて話をして、口に出すようにすることで思い起こさせワークシートに書けるようにする ・これまでの活動全体を振り返り、まとめをワークシートに記入し、発表する。	15

◇授業の観点
・対人関係ゲームの中や振り返りの場面で、自分や友だちのよさに気づき、認め合うことができていたか。

同ゲームの継続から

①大切にしたい視点を明確にする
・個を大切にする視点、個を取り巻く集団を育てる視点を大切にした。
→あたたかいかかわりや声がけの姿が見られ、児童・集団の成長を感じることができた。

②２年目の「くまがり」ということで、ゲームの名前を変えたり、作戦やルールにクラス独自の工夫をしたりすることができ、クラス全員で楽しむ意識が高まった。

③お互いに安心して生活したり学習したりするための枠（ルール）作りのための手立て
・ルールでは、「みんなが楽しくできる」ように友だちやクラス全体に心を寄せて修正していくことができた。

・活動の流れの視覚化　・教師による明確な指示　・児童の活動を見通した場の設定、の3点が大切であることがわかってきた。

(参考)まつがりのルール変更の経緯　※「まつがり」の由来は、「松ヶ丘小で作ったくまがり」

〈話し合いで子どもたちから出てきたこと〉

① 宝を箱にする。パスはできない。

→今まではドッジボールを宝とし、投げてパスしてもよいというルールだった。話し合いの場面で、ボールを扱うことが苦手な児童から「ボールをパスされても、その後どうしていいかわからなくなる」「ボールをパスされると困ってしまう」という意見 が出てきた。ボールの方が投げられるからいい、という意見もあったが『みんなが楽しめる』ということを考えて、投げられないように段ボール箱を飾り付けて宝箱にしようというルールができた。

② コートの広さを決める。

→今までくまがりをやっていて困ったことを聞いてみると、「どこまで逃げていいかわからない」「走っていたら壁の方にぶつかりそうだった」という意見が出てきた。混乱やケガを防ぐことが楽しむことにつながると考えた子どもたちは、コートの範囲を決めてコートから出ないようにしようというルールを作った。

③ 「ぱっかん」したらコートの外の避難所に入り、仲間がタッチしてくれたらゲームに戻る。

→チームの仲間を助け出す場面を増やしたい、という意見があった。最初の案は「同じ役割同士でタッチしたら凍り鬼のようにその場に座ろう」というものだったが、復活したときに狙われてしまうし、逃げる人とぶつかったら危ないという反対意見が多く出た。しかし、そこで提案した児童の考えを尊重して、新しく「その場に座るんじゃなくて、コートの外の避難所に入り、仲間がタッチしてくれたらゲームに戻るようにしよう」というアイデアが出された。できないから却下するのではなく、いろいろな人の意見を取り入れてできる形に変えることができた。「それなら大丈夫だね」と賛同する児童が多く出てきて、このルールが採用された。

④ 役割の名前

→本来のくまがりでは、「くま」「きつね」「きじ」の役割がある。子どもたちはせっかく名前を「まつがり」にしたから、松を役割に入れたいと考えた。松を使った言葉で３つの役割を作ることになり、辞書で調べてみると、「松竹梅」という言葉が出てきた。そこで役割の名前を「松」「竹」「梅」にしてはどうかという案が出た。

異ゲームの積み重ねから

○児童の実態把握・個々や集団の変容を感じることができ、より焦点化された活動を仕組むことができた。

○自分のよさが周りにいかされることで、安心感や満足感を持って活動を楽しめた。

●活動が深まり、個々の願いが強くなると、ルールの折り合いのつけ方は難しくなった。

●教師側の持つ授業構想として、児童の実態に適したゲームを組み立て、積み重ねていくことが大切である。

人権感覚を高めていくような教師の言葉がけ

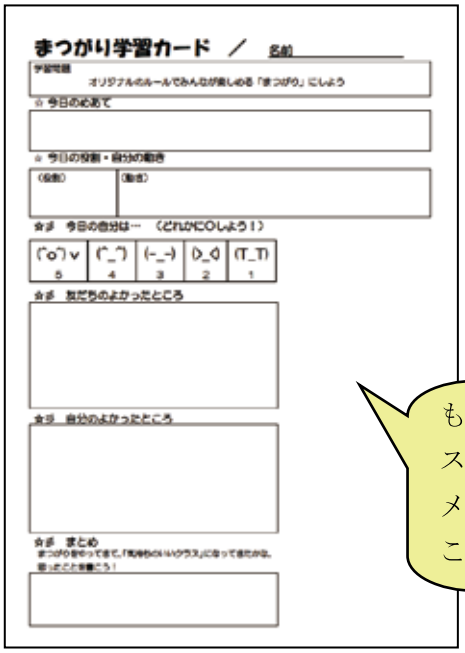
○担任からの人権感覚を高めていくような言葉や声がけは大切で、子どもが気づかないところに担任が触れて、振り返らせていくことが重要である。

○教師による賞賛の声がけで他の班のよさや自分(たち)が認められた嬉しさを感じた。

○児童自ら価値ある言葉を発するようになった。

●教師の姿勢が重要であるという自覚を持って指導・支援していきたい。

振り返りの場の設定


まつがり学習カード ／ 名前

学習目標
オリジナルのルールでみんなが楽しめる「まつがり」にしよう

☆ 今日のめあて

☆ 今日の反省・自分の動き
（反省）（動き）

☆ 今日の自分は… （どれかに○しよう！）
(^o^)v 5 | (^_^) 4 | (-_-) 3 | (>_<) 2 | (T_T) 1

☆ 友だちのよかったところ

☆ 自分のよかったところ

☆ まとめ
まつがり学習って楽しく、「笑顔のいいクラス」になってきたから、思ったことを書こう！

○お互いのよさを認め合ったことは、自己肯定感を持てたり自尊感情を高めたりすることにつながった。
○友だちのよいところやがんばっているところを付箋に書いて渡し合いをしたことで、自分のよさに気づくことができた。
○友のよさや頑張りに目を向けることができた。
○友だちからの評価で自尊感情の高まりにつながった姿が見られた。
●チーム内でお互いのよさを共有する方法もよい。
●平等に付箋が渡せる工夫が必要である。

もらった付箋を貼るスペースが確保されているので、メッセージを累積していくことができる。

5　研究のまとめ

◇今後の授業について
・相互に認め合う活動が一時的に終わることなく、各教科や日々の活動の中で継続的に行われるようにしたい。
・各教科の特性を大切にしながら人権教育の視点を掘り下げる必要がある。
・教師主導から子ども同士がお互いのよさを認め合いながら自分たちで学び合う姿を目指したい。

◇学級経営で大切にしたいこと
・互いに認め合う雰囲気づくり（・・・以下の「隠れたカリキュラム」を参照）
・集団の中で個が生かされる指導や支援のあり方を研究し、深めていく。

参考資料：「隠れたカリキュラム」について

文科省「人権教育の指導方法等の在り方［第三次とりまとめ］」では、「『いじめ』を許さない態度を身につけるためには、『いじめはよくない』という知的理解だけでは不十分である。実際に『いじめ』を許さない雰囲気が浸透する学校・学級で生活することを通じて、児童生徒ははじめて『いじめ』を許さない態度を身につけることができるのである。だからこそ教職員一体となっての組織づくり、場の雰囲気づくりが重要である」（指導等の在り方編Ｐ9）と述べています。

学級集団がいじめ・からかいを許容するような雰囲気をもっているといじめは起きやすく、「いじめは絶対に許さない」という集団の雰囲気があるといじめは起こりにくいことは、集団の同調行動として見られることです。教職員集団が、本気になっていじめをなくそうと一致団結して動いている姿勢を、児童生徒、保護者、地域に積極的に発信していくことが、いじめをなくす取組の第一歩です。

また、教職員が意図せずに教えている事柄の中で、教職員の言葉使い、日々のさりげない態度等が、児童生徒を安心させたり、その反対に、いじめ等を許す雰囲気や環境を作ったりすることになっていないかを見返すことが大切です。

（長野県教育委員会　平成２４年度　「人権教育指導資料集」１１ページより）

平成27・28年度文部科学省人権教育研究指定校

体験的な活動を通して育てる人権感覚
―飯田市立龍江小学校の取組―

１　研究のテーマ

互いの良さを認め合い、助け合う児童の育成
～体験的な活動を通して人権感覚をどう育てるか～

２　研究のテーマを設定した背景

本校児童の実態を見ると、ほとんどの児童が同じ保育園から入学してくるため６年間同じ友だちと学校生活を過ごすことになる。お互い仲が良いが、その一方で以下のような課題があり、その解決に向けて１年次の実践を進めてきた。

一つ目の課題は、友だちに対する先入観、「Ａさんはこのような人である」という小さい頃からの固定的な見方を変えていくことである。１年次の研究では、構成的エンカウンターを取り入れ、シェアリングの場面を大事にしながら、成長しつつある友だちの良さに気づけるように授業を工夫し取り組んできた。「友だちのことを知ることができてうれしかった」という感想に加え、「私のことを友だちに知ってもらえてうれしかった」という感想が出てきた。友だちの新たな良さに気づき知る喜びと、友だちに自分を理解してもらえる喜びを味わう中で、友だちに対する見方が変わってきている。２年次は、それぞれの友だちのもつ個性を良さとして捉え、尊重し認め合っていこうとする姿勢をさらに育てていきたいと考えた。

二つ目の課題は、子どもたちの人権に係わる知識を、実感し実践するところまで高めていくことである。１年次の研究では、学級の「ふるさと学習」や全校縦割り班「龍江の輪」による児童会活動など具体的な体験活動を通して学ぶことを大事に考えて取り組んだ。児童会祭りでは、異学年の児童が班ごとに分かれ、お店やゲームなどを考えて準備を進めた。「助け合おう」「仲良くしよう」などの言葉をよく使う子どもたちであるが、異年齢集団ということもあり友だちの気持ちを十分に推し量ることができずトラブルになってしまうことがあった。実際にトラブルを乗り越えながら一緒に準備をしていく中で、どう行動することが助け合うことにつながるのか、互いの考えの違いを乗り越え一緒につくりあげていくためにどう折り合いを付けていくのかなど多くのことを学ぶことができた。２年次の研究では、異学年集団による児童会活動をさらに発展させ、保護者や地域など様々な立場の方々にも係わっていただきながら体験活動を繰り返し行っていきたいと考えている。その中で、様々な考えの違いを、どう折り合いを付けながら乗り越えていったらよいのか学び、助け合いながら実践していく力を高めていきたいと考えた。

三つ目の課題は、教師の指導方法の工夫と改善である。１年次の研究では、人権教育の視点から教科学習をはじめとする全教育活動を見返し、人権教育の指導計画を作り直した。また、本校の特色である、地域講師参加による学習、福祉施設や保育園との交流、全校縦割り班「龍江の輪」による活動、飯田市内で実践されている小中連携の活動などを、人権教育の視点から改めて捉え直し、活動展開を工夫したり、活動の視点を児童に示したり、活動中に見られた自分や友だちの良さなどについて振り返る場面を大切に位置づけたりするなど指導方法の工夫と改善を進めてきた。２年次の研究では、振り返りの場面に焦点を当て、様々な角度から互いの良さに気づき合えるよう手立てを工夫していきたい。

そこで、本校の特色でもある体験的な学習を通して、年齢や立場を異にする多くの人々と係わる中で人それぞれ違った価値観をもっていることに気づかせたい。また、一緒に活動を計画し実践する中で、自分の立場だけでなく他者の立場も尊重し認め合おうとする心情や、互いの価値観の違いを折り合いをつけながら乗り越え助け合って行こうとする態度を育てたいと考え、上記研究テーマを設定した。

3　研究の推進体制と計画

◆校内研究体制

校　長 ― 教　頭 ― 教務会（連学年主任を含む）

学習指導研究推進委員会（研究・人権教育・交流教育各主任、教務主任）

＊人権教育に関わる研究の推進計画の作成と調整

人権教育研究部会・人権教育係＊人権教育全体計画の作成と調整

【授業研究】
各教科・道徳・特別活動における、人権感覚の育成を視点とした授業研究

【全教育活動】
日常生活における人権感覚を育成する視点からの支援・指導。学級・全校・地域との人間関係づくり

地域連携担当係
・学校の窓口として地域連携をコーディネート
特別支援教育係・個に応じた指導計画
生徒指導係・個の権利を守る
学校保健委員会・悩みや不安への支援
安全教育係・安全安心な学校生活
交流教育係・福祉やボランティア等
小中連携・一貫教育担当
・竜東竜峡中学校区内の小中学校の交流を推進
職員研修係・教職員の人権感覚を磨く

◆児童の活動

・児童会活動…代表委員会による「あいさつ運動」「優しい言葉遣い運動」等の日常的活動を通して、人権感覚の向上。
　児童会による全校集会活動「ふれあい集会・七夕集会/児童会祭り」等。
・「龍江の輪（縦割り班）」での活動……清掃や「学校りんご園」での栽培活動を通して、異学年間の助け合いや思いやりの心を醸成。
・全校音楽集会…児童が作り上げる集会。みんなで作る喜びを味わう。
・学校りんご園での栽培活動
　…姉妹学級での交流、地域講師との交流。
・今田平での農業体験
　…友達との協力、勤労の意義、地域講師との交流。
・ふるさと発見学習
　…地域との交流、連学年との交流
・地域クラブ活動…友達との協力、異年齢間での仲間意識や思いやりの醸成、個性や能力の伸長、地域講師の方々との交流。
・和太鼓、今田人形、金管の活動
　…友達との協力、地域の伝統文化の尊重、地域の祭り等へ参加を通して地域の方々と交流

◆校外からの支援・指導

長野県教育委員会授業研究会への指導
　研究推進への助言と指導
飯田市教育委員会研究推進への助言と指導
竜峡・竜東中学校区小中連携一貫教育
・２中学校６小学校との連携

◆地域との連携

・地域講師による総合的な学習（龍江和紙、大豆、米づくり）、ふるさと発見学習（龍江の自然、歴史、文化遺産等の学習）
・地域クラブ活動（天竜峡焼き、今田人形、郷土料理、お花お茶、伝統と文化等）
・りんご園後援会による支援
　りんご栽培
・学習お助け隊による学習支援
　習字、裁縫、読み聞かせ等
・「ゆいの里」（福祉施設）との交流
・家庭における人権教育
・学校評議員等による学校評価

人権感覚の育成
互いの良さを認め合い、助け合う児童の育成

4　実践事例　～３・５年合同　総合的な学習の時間～

(1)　単元名　「ありがとうを伝えよう～アフリカン太鼓・ダンスで～」

(2)　単元目標

アフリカン太鼓の演奏とダンスで、いつも自分たちの活動を支えてくれている地域の方々に「ありがとう」の気持ちを伝えたいと願う子どもたちが、チーム毎に役割を決め、太鼓やダンスの練習をし「ありがとう」の気持ちが伝わるか話し合いを重ねていくことを通して、アフリカン太鼓とダンスに対する意欲を高め、３年生と５年生がともに協力し、試行錯誤しながら演奏を創り上げていくことができる。

(3)　人権教育の視点

○「ありがとう」の気持ちを伝えるために、どんな演奏やダンスにしていきたいか自分の考えや気持ちを伝えたり、友だちの考えや思いを尊重して聞いたりすることができる。（価値的・態度的）

○お互いの演奏やダンスを認め合い、よりよいものにするために支え合おうとする。（価値的・態度的）

(4)　子どもたちに期待する姿　（※『サブニュマ』は、外部講師のアフリカンドラム演奏グループ）

	３年生	５年生
活動を通して	『サブニュマ』のたけちゃんたちの想いを知る。 ・アフリカン太鼓とダンスで「ありがとう」の気持ちを伝えるには、何が大切か、自分たちはどうしていくといいか話し合う。・参観日に発表し、さらによくしていくための課題を明確にする。 ・お互いにアドバイスしながら練習する。 ・龍江文化祭で発表する。	
期待する姿	友だちの立場で考えたり、自分と友だちの考え方や受け止め方のちがいを受け入れ、お互いが気持ちよく活動していくよさが分かる。	自分を出し切って踊ったり、太鼓を叩いたりする気持ちよさに気づき、思い切って自分の考えを言ったり、新しいことに挑戦してみようとする。
人権教育目標	【３・４年】 友だちと自分とのちがいを認め、お互いに自分の気持ちをしっかり表現し一人一人の違いを支え合えることができる。	【５・６年】 認め合い、お互いに人権を尊重することができる。

(5)　単元を通して見られた３年H児の変容

①太鼓を作ろう

・サブニュマの仲間として一緒に太鼓をたたけるように、自分の太鼓をつくる。お家で作った大きな手作り太鼓を持ってきて、友だちと遊んでいた。

②たけちゃんたちと一緒に演奏しよう

・自分で作った太鼓をたけちゃんの太鼓の音と合わせることが楽しそう。低い音や高い音に気付き、自分は低い音の太鼓を持っていることに気づく。踊りよりもたけちゃんと一緒に太鼓をたたきたいようだった。

・「たけちゃんやサブニュマの人にいろいろ教えてもらったからありがとうを伝えたい」（学習カードより）

③５年生にお願いし、ともに発表に向けて練習する

・オリジナルダンスを考える場面。友だちとふざけたり人に嫌がることをしたり、なかなか５年生の話を聞かなかった。

・午後、５年生から「本当に発表する気があるのか」「手伝ってほしいと言ってたのに、これでは手伝いたくない」と言われる。

・「自分たちはふざけすぎていた。５年生に迷惑をかけてしまった。こちらからもう一度お願いしたい」真剣に考えてくれている５年生のために自分たちもしっかりしなくちゃいけない、という思いを持って話し合う様子が見られる。

④文化祭に向けて練習しよう

・龍江文化祭に向けて、全校集会で発表してみて、どうだったか話し合う場面。「自分が思っていたよりも楽しくなさそう。感謝の気持ちが伝わるようにもっと大きな動きをしたい」

・積極的に他のチームに「大きく動かしたほうがいいよ」などと声をかけていた。彼自身も大きな動きになってきた。班の人たちと一緒にいることが楽しそう。

⑤龍江文化祭で発表する

・発表前日熱があり体力もなさそうな様子だった。しかし、「班のみんなと楽しんで踊りたい」、「たけちゃん一緒とにやるのは最後かもしれない」という思いがあって、具合が悪い中参加した。

５年生の学習カード～R児の学習カードより～

始めの頃の学習カードでは、何をどのように書いていいのかわからず、記入することができなかった。

１０月５日の授業では、３年生が真剣に考えてくれないことから、学習カードに何度も自分の気持ちを書きなおしていた。その姿を見ていて、担任の「もう一度自分の気持ちに正直に書いてみよう。」という言葉から、学習カードいっぱいに自分の気持ちを書いた。「注意しているのに、ふざけていて頭に来た。ぼくはこんなことなら、芸能祭に出たくない。３年生が頼んできておいて、こんなにふざけるのであれば、一生懸命やっているぼくたちが、ばかみたいだ。」その後その気持ちを、３年生に正直に伝えた。

次の授業での学習カードには、「〇〇ちゃんが班長を助けていて、すごいと思った。ぼくも真剣に考えたいと思います。」と、３年生の姿から、自分を振り返り、３年生に伝えたからには自分も頑張ろうとする姿が見られた。

芸能祭後の学習カードには、「初めは正直めんどうだと思ったし、はずかしいと思ったけど、本番思いきりできて良かった。それに、ぼく自身が少しかもだけど、自分を出すことができるようになったところが、成長したと思う。」と書かれていた。

～考察～

アフリカンダンスで、思いきり表現し伝えたことで、龍江地域の方の喜ぶ顔、楽しそうな顔を見ることができ、頑張ってきたことへの満足感を得ることができた。これまでの過程で、伝えにくいことで

あっても、正しい思いを相手に伝えることは、とても大切なことであり、そうすることで、自分自身の気持ちも成長する事ができたと感じる。

5　研究のまとめ

〇題材のよさ

・担任自身もアフリカン太鼓とダンスの魅力に惹き込まれ、子どもたちと一緒になって体を動かし楽しんだ。気持ちを体で伝えることの楽しさ・素晴らしさを感じることができた。
　このように、太鼓の音に合わせてダンスをすることは、上手い下手に関わらず気持ちを開放的にし自然に入り込んでしまう題材であった。

〇異年齢の交流のよさ

・５年生は、真剣に思いを伝えてくれることでこんなにも３年生は変わるんだな、と感じ、相手を思いやって伝えることは悪いことではないと感じることができたと思う。
・３年生は、異学年の仲間から「真剣にやってほしい」と強く言われたことは衝撃的で、「大好きな５年生だから本気でやりたい。」と思った。
　このように異学年での交流は、普段の生活とは違い、自分の思いを伝えたり気持ちを変えてくれたりする機会になった。

〇外部講師のよさ

・具合が悪かったＨさんが当日発表に参加することができたのは、１人で発表するのではなく、サブニュマの方が練習のたびに声をかけてくださり、関係を築けたからだと思う。
　このように、講師の皆さんと一緒にご飯を食べたり遊んだり、声をかけてくださることで、担任との関係だけでなく、たくさんの人たちと関わり、新たな関係を築けた。そして、一人一人のよさを再発見することができた。

〇ふりかえりのよさ

・１時間を通して感じたこと・思ったことを「書くこと」で次回に活かせたり自分やグループの成長を感じたりできた。
・また思ったことを書いておくだけでなく相手に伝えることで話し合いが深まったり、相手を認めることにつながった。

6　研究の成果

(1) 異年齢集団で学ぶ場を設定したことで

・高学年の児童は、年下の子に対する気配りや、自らよい見本になろう
　とする姿が見られた。また時には、本音を出し合い、真剣に思いを伝える大切さを学ぶ場になった。
・よりよい考えや思いを持っていても、表現の仕方が分からず伝えられない児童にとって、具体的な言い方や様々な表現のしかたを学ぶよい機会となった。

(2) 外部講師をお願いしたことで

・サブニュマの皆さんとの交流を通して、自分の殻を破って楽しく体を動かすことや仲間との繋がりを大切にしていくことを学ぶことができた。また継続活動をしたことで、サブニュマの皆さんとの関わりも深まり、子どもたちを支えてもらうことができた。

◎本84号に掲載した長野市立松ヶ丘小学校及び飯田市立龍江小学校の実践は、本年５月より各地区において順次行われる、学校人権教育研修会等において、２校の取組をまとめた紙媒体の「実践事例パンフレット」として各校にお配りします。どうぞご活用ください。